小川未明論

――母と子の問題を中心に――

長田真紀

一

「日本のアンデルセン」と称される小川未明（明治十五年――昭和三十六年）は、童話作家、児童文学作家といった範疇では捉らえきれない作家である。実際、未明の出発は、自然主義全盛期の文壇にあって、新浪漫主義の美意識に裏付けられた小説創作からはじまった。

また童話についても、未明自身、単にこどものための読み物とは考えず、おとなにも十分通じる文学であらねばならないとの認識をもち、「むしろ、大人に読んでもらつた方が、却つて、意の存するところが分ると思ひます」（「今後を童話作家に」大正十五年五月十三日「東京日日新聞」）と述べるほどであった。

本稿では未明の作品をいくつかとりあげ、童話というかたちをとりながら実はおとなにこそ語りたかった、未明の母子観について一考を試みたい。

二

未明文学における母と子の問題を考えるにあたって、『牛女』（大正八年五月「おとぎの世界」第2号）は、その濃厚さにおいて先ず特筆される作品である。

ある村に、体の大きく性質のやさしい、「牛女」と呼ばれる聾唖の女がいた。牛女は寡婦で、一人の男の子がいた。牛女は、その子供を非常にかわいがり、また子供も母をとても慕っていた。牛女は、村の人々から力仕事を引き受けてその日暮しをしていたが、病気にかかりとうとう死んでしまった。

「自分の霊魂は何かに化けて来ても、きつと子供の行末を見守らうと思ひ」死んでいった牛女は、その冬、雪の積もる西の山に黒い姿を現す。

それは、子供が町の商家に奉公にいってからも、毎年冬になると繰り返し見られる光景であった。

しかし、ある年、子供は西の山に現れた母親の許しも受けずに、勝手に南の国へ行ってしまった。するとその冬は、山に牛女の姿は現れず、春がきたころ、町の中を子供を探して歩き、暗い路地に立ってさめざめと泣く牛女が目撃された。

南の国で裕福になった子供は故郷が懐かしくなり、生まれた村に帰って、りんご栽培の事業を始める。しかし、毎年りんごの実が大きくなりかけると、一時に虫がつき実が落ちてしまう。村の老人から「何かの祟りかも知れない。」と言われた子供は、かつて町から南の国へ行った時、母に無断で行き、故郷に戻

ってからもまだ法事を営まなかったことに気づいた。

「あれ程、母親は自分を可愛がつてくれたのに、而して、死んでからもあゝして自分の身の上を守つてくれたのに、自分は其れに対して、あまり冷淡であつた」「きつと、これは母の怒りであらう」と思った子供は、懇ろに母親の霊魂を弔って、坊さんや村の人々を呼び、真心をこめて法事を営んだのである。

すると、明くる年から夏になると、女王のような大きなこうもりが、たくさんのこうもりを率いてりんご畑の上を飛びまわり、害虫をすべて食ってくれたのである。

毎年たくさんのりんごを収穫した子供は、幸福な百姓となったのである。

当初は、雪のある冬の間だけ西の山に現れていた牛女が、ついには、りんご栽培という子供の仕事を助けるこうもりとして毎年夏の晩に現れるにいたる。

人が心寂しく内向的になる冬という季節、死者の住む西方浄土のイメージをもつ西の山に現れる存在から、生命が輝き溢れる夏という季節に、子供の生計を直接左右する存在として現実界で動きまわることになる。

つまり牛女は、子供を見守る母から、子供の生に積極的に関わり行動する母へと変貌しているのである。

「自分の霊魂は何かに化けて来ても、きつと子供の行末を見守らう」という牛女の思い、仏教でいうところの執着（しゅうじゃく）は、よりいっそうはっきりしたかたちをとることになる。

この変貌の起因は、いうまでもなく、わが子が母である自分の存在を忘失したことへの怒りとかなしみである。それは、子供のためにすべてをなげうつことができた母が、たった一つ、決して許せなかったことであった。

古田足日は児童文学作家の直感で、「牛女の愛情は非常に利己的である」（「野ばら・牛女」『文学教育基礎講座　3』昭和三十二年十月　明治図書出版）と看破しているが、我が子への温かく深い愛情ゆえに、子供の生に圧力を加え続けることになる母親のアンビバレンツな内奥を、未明は鋭く見つめているといえよう。

子は大人になる過程で、母（親）に対して無数の裏切りを繰り返し犯す。母は子を大人にする過程で、子の裏切りを甘んじて受け入れねばならぬ。

子供が母である自分の存在を忘れるという裏切りを許せなかった牛女は、こうもりにまで転生し、子供に執着し続けるのである。

三

さて、先に、『牛女』は、子供を見守る母から、子供の生に積極的に関わり行動する母へと変貌していると述べたが、未明の第一の代表作である『赤い蠟燭と人魚』（大正十年二月十六日～二十日「東京朝日新聞」夕刊）は、まさに母の行動により物語が展開していく。

なんといふ淋しい景色だらうと人魚は思ひました。自分達は、人間とあまり姿は変つてゐない。魚や、また底深い海の中に棲んでゐる気の荒い、いろ〳〵な獣物等とくらべたら、どれ程人間の方に心も姿も似てゐるか知れない。夫れだのに、自分達は、やはり魚や、獣物等といつしよに、冷たい、暗い、気の滅入りさうな海の中に暮らさなければならないといふのはどうしたことだらうと思ひました。（中略）

私達は、もう長い間、この淋しい、話をするものもない、北の青い海の中で暮らして来たのだから、もはや、明るい、賑かな国を望まないけれど、これから産れる子供に、こんな悲しい、頼りない思ひをせめてもさせたくないものだ。

子供から別れて、独りさびしく海の中に暮らすといふことは、この上もない悲しいことだけれど、子供が何処にゐても、仕合せに暮らしてくれたなら、私の喜びは、其れにましたことはない。

人間は、この世界の中で一番やさしいものだと聞いてゐる。そして、可哀さうな者や、頼りない者は、決していぢめたり、苦しめたりすることはないと聞いてゐる。一旦手附けたなら、決して、其れを捨てないとも聞いてゐる。幸ひ、私達は、みんなよく顔が人間に似てゐるばかりでなく、胴から上は全部人間其のまゝなのであるから——魚や、獣物の世界でさへ、暮らされるところを見れば——其の世界で暮らされないことはない。一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、決して無慈悲に捨てることもあるまいと思はれる。

全五章からなる『赤い蠟燭と人魚』の第一章は、身重の人魚が、「魚や、獣物等といつしよに、冷たい、

暗い、気の滅入りさうな海の中に暮らさなければならない」自分の境遇に疑問を抱き、嘆き悲しむことに未明の筆は費されている。自らの置かれた境遇を否定した人魚は、「せめて、自分の子供だけは、賑やかな、明るい、美しい町で育てて大きくしたい」という一心で、「二たび我子の顔を見ることは出来ない」という代価を覚悟の上で、子供を陸に産み落とす決心をするのである。

産み落とされた人魚の娘は、ろうそく屋を営む老夫婦にお宮の下で拾われる。老夫婦は人魚の娘を、「神様のお授け子」として大事に育て、娘の方も、白いろうそくに赤い絵の具で絵を描き店を助ける。娘が絵を描いたろうそくをお宮に供え、その燃えさしを身につけて海に出ると決して遭難しないという話が遠方まで広まり、ろうそく屋は大繁盛し、また、お宮の神様の評判も高まる。

しかし、ある日、南の国からやって来た香具師（やし）がまことしやかに言った、人魚は不吉なものだから手放さないと悪いことに遭う、という言葉と大金に心奪われた老夫婦は、娘を売ってしまう。

娘が売られた日の晩、ろうそく屋に、長い髪がびっしょり水に濡れた女が訪れ、娘が描き残していった真っ赤なろうそくを買っていった。その夜、海は近ごろにない大暴風雨となる。

その後、赤いろうそくがお宮に点った晩は必ず大暴風雨となり、また、赤いろうそくを見ただけでも、その者には災難が降りかかった。ろうそく屋は店を閉めたが、誰がお宮にあげるのか、たびたび赤いろうそくが点った。霊験あらたかであったお宮は鬼門となり、幾年も経ずしてその町全体が滅びてしまった。

娘を幸福にしてくれるであろうという期待を裏切られた母の怒りと怨嗟が、大暴風雨を起こし、ついに

は町全体を滅ぼすにいたる。その矛先は、ろうそく屋の老夫婦や香具師といった人間のみならず、町のお宮にまで向けられる。

母のかなしみと憤怒は当然のことである。しかし、人魚として海で暮らす現実を受け入れず、人間世界こそ理想郷と考え、人間世界に娘を手放したのは、当の母自身である。娘の人魚にもたらされた悲劇は、母から出発したものといえよう。そして結果として、娘の悲劇は母の苦しみとして再び母のもとに戻ってくるのである。

四

『金の輪』（大正八年二月二十一日、二十二日「読売新聞」）は、未明の全作品のなかで、完成度において一、二を争う作品であり、詩的情趣溢れ、未明文学の魅力が遺憾なく発揮された傑作である。

長い間病気で臥せっていた太郎は、まだ春浅い三月の末、漸く床を離れることができた。往来に出てみたものの、子供たちは遠くへ遊びに行っているらしく、誰の姿も見えない。しょんぼりと太郎が細い道を歩いていると、鈴を鳴らすように、金の輪の触れあう音が聞こえてくる。それは、ひとりの少年が二つの金の輪をよい音色を響かせながら回して走っているのであった。太郎には見覚えのない少年であったが、少年の方は太郎に向かって友達のように微笑んで去って行ったのである。

翌日の同じ時刻、太郎は再び金の輪を回して走ってくる少年を見る。少年はいっそう親しげに微笑み走

って行った。太郎は、いままで一度も見たことのないその少年が一番親しい友達のような気がして、明日こそ話しかけて友達になろうと思いながら、家に入ったのであった。

その夜、太郎は少年と友達になり金の輪をひとつ分けてもらい、一緒に赤い夕焼け空の中に走って行く夢をみた。

明くる日、太郎はまた熱が出て、二、三日めに七つで亡くなってしまったのであった。

この作品は、太郎と金の輪を回す少年の話であり、一見、母と子の問題とは無関係のように思われる。しかし、四百字詰原稿用紙にして五枚ほどの作品のなかに、次の文章が記されているのが注目される。

其の晩、太郎は母親に向つて、二日も同じ時刻に金の輪を廻して走つて行つた少年のことを語りました。母親は信じませんでした。

長らく病気で床に就いていた太郎には、漸く外へ出られるようになっても、一緒に遊ぶ友達はいない。ぽつねんとする太郎が、微笑みながら金の輪を回して走っていく少年と出会ったことは、この上もない喜びであった。それが二日続いた晩に、太郎は母親に話すが、母親は太郎にとって一番うれしい出来事を信じることができない。

太郎が少年に出会ったこと、そして少年と金の輪を回す望みが夢の中で叶えられたことは、結果的に数日後に七つで死んでいく太郎の救いとなっている。太郎の心の分身であるかのような少年が、白昼夢の幻であったのか、現(うつつ)のものであったかは問題ではなく、太郎にとって真実であったということだけが確かな

ことである。

太郎の一番身近かにいる母親が、子供にとっての真実を容易に信じられないところに、未明が見据えた母と子の永遠の距離が語られているように思われてならない。

五

ここで、未明自身の出生、幼少年期の伝記的事項に触れておきたい。

本名、小川健作は、父・澄晴、母・千代の次男として明治十五年四月七日、新潟県中頸城郡高城村（現・上越市）に生まれた。長男が生後まもなく病死したため、両親は次に生まれた未明を非常に案じた。「捨て子は丈夫に育つ」という当時の俗信から、両親は未明を形の上の捨て子とし、近所のろうそくや灯油を扱う商売をしていた丸山家で、貰い乳をするなど三才頃まで育ててもらっている。

さて、未明の父・澄晴は上杉謙信の熱狂的な崇拝者であり、謙信の居城があった高田の春日山城址に、謙信を祭る神社を独力で創建すべく奔走していた。明治三十年五月、未明が十五歳の時、春日山神社は創建されるが、ちょうど未明の幼少年期にあたる間、澄晴はほとんど家庭を顧みない生活を送っていたといわれる。

未明の次女・岡上鈴江氏は『父小川未明』（昭和四十五年五月　新評論）のなかで、澄晴が神社創建のための寄金集めに奔走しているあいだ、千代と未明は「母子家庭のように肩をよせあって」暮らしていた

のであろう、と推量している。また、

私は子どもの頃、春日山へ帰った時、祖母の態度から、ふと、

「おばあさんはあたしたちより、おとうさんのことでいっぱいなんだな」

と感じたことがあった。

そして、それは今考えると、ごく自然な祖母のいつわらざる愛情だと思うのである。

と述べている。

父親不在の家庭で、母・千代の強い愛情によって育まれたことは、未明にとって至福であったにちがいない。しかし同時に、母の子に寄せる無言の重圧に息のつまるような思いもしたのではなかろうか。雪に閉ざされた越後の冬には、いっそうその思いが強まったことだろう。

未明の作品には、未明自身が幼少年期に感じとった濃厚な空気が投影されているのかもしれない。

六

未明は、母と子の濃やかな愛情を描きながら、母という存在の複雑性を、母なるもののかなしみを作品のなかに潜ませた。

近年、さまざまな立場から、日本文化・日本社会における母子密着性が指摘されるようになったが、小川未明がすでに大正期の童話作品においてこの問題を扱い、少なからぬ疑問と批判のまなざしを投げかけ

たことは、未明文学の特異性のひとつであり、また今日的意義でもある。